Osaka University Knowledge Archive

Title	「多い／少ない」の段階形容詞としての特徴について：段階形容詞「高い」との比較から
Author(s)	包, 雅梅
Citation	間谷論集. 2022, 16, p. 63-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91350
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈研究論文〉

「多い／少ない」の段階形容詞としての特徴について
――段階形容詞「高い」との比較から――

包　雅梅

〈キーワード〉 段階形容詞　多い　少ない　装定　述定

１．はじめに

数量を表す形容詞の「多い」「少ない」は（1）と（2）が示しているように、他の形容詞と異なり、装定用法において使用制限があることが仁田（1980）や寺村（1991）などによって指摘されている。また、「多い」は述定用法においても使用制限があると佐野（2016）は指摘している。(3）がその例である。

(1) a. * 多い人が庭に集まっている。　（仁田 1980）
　b. * 多い女の人が歩いてきた。　〃
　c. * 少ない本がある。　〃
　d. * きのう電車事故があって、少ない人がけがをしました。　（寺村 1991）

(2) a. 大きい蟻が歩いている。　（寺村 1991）
　b. 高い山に登ると、平地では見られないチョウに出会う。　（BCCWJ [1]）

(3) a. ?? クジラは多い。　（佐野 2016）
　b. クジラは大きい。　〃

このように、本研究は、数量形容詞の「多い」と「少ない」が装定用法と述定用法の両方において使用制限があることに注目し、その理由を明らかにすることを研究目的とする。具体的には、形式意味論における段階形容詞に関する研究成果を参考に、「多い」と「少ない」が段階形容詞（gradable adjective）の性質を持つことから「多い」と「少ない」の使用制限を説明する。

本研究の構成は次のとおりである。次の２節では、「多い／少ない」の使用制限に関する先行研究及びその問題点を概観し、本稿の主張を提示する。続く３節では、先行研究における段階形容詞の意味的特徴に基づき、「多い」と「少ない」が段階形容詞であることを示す。そして、４節では、「多い」と「少ない」と他の段階形容詞との類似点、及び相違点を述べ、それに基づいて「多い」と「少ない」の使用制限を解釈する。

２．先行研究とその問題点

仁田（1980）は、「多い」と「少ない」が装定用法を有してないのは、「多い」と「少ない」が被修飾名詞の内在的に有している性質・属性を表していないからだと述べている。この説は、形容詞の装定用法の意味論的なあり方は主要語が本来的に内包していると考えられる性質・属性を表さなければならないということを前提としている。

一方、今井（2012）は（4）を挙げ、「多い」と「少ない」の類義語の「おびただしい、膨大だ、豊富だ、潤沢だ、希少だ、わずかだ」などが装定用法を持つことを指摘し、形容詞の装定用法は被修飾名詞の内在的に有している性質・属性を表す必要があるという説を批判している。そして、「多い／少ない」には存在の意味が含まれる一方、その類義語には含まれないことを指摘し、両者の違いを説明している。

(4) a. {おびただしい／＊多い} 人が庭に集まっている。　（今井 2012）
　b. 国会図書館には {膨大な／＊多い} 書物がある。　〃
　c. 倉庫には {豊富な／＊多い} 食料がある。　〃
　d. そのプロジェクトには {潤沢な／＊多い} 予算が配分された。　〃

e. アフリカには｛稀少な／＊少ない｝資源がある。 〃

f. ｛わずかな／＊少ない｝金が大きなトラブルの元になることがある。 〃

本研究は、形容詞の装定用法は被修飾名詞の内在的に有する性質・属性を表す必要があるという仁田（1980）の立場に立たないという点では今井（2012）と同様である。しかし、包（2021）で述べたように、「多い」、「少ない」とその類義語の「おびただしい、豊富だ、潤沢だ、希少だ、わずかだ」などの違いは、今井（2012）が主張するような存在の意味の有無によるのではなく、両者の段階性における違いによると考えられる。「多い」と「少ない」が fully gradable という性質を示す一方、上記の類義語は fully gradable ではないという点で、両者は異なっている。この異なる性質によって、「多い／少ない」が被修飾名詞を類別する機能[2]を持つ必要があるのに対し、上記の類義語は被修飾名詞を類別する機能を持つ必要がないという違いが生じると考えられる。

本稿は、包雅梅（2021）と同じく「多い／少ない」が段階形容詞であるという前提に基づいているが、上述のような類別の機能ではなく、段階形容詞の別の意味的特徴に着目し、装定が不可能な理由についてより詳細な検討を行う。

結論からいうと、「多い」と「少ない」は、段階形容詞として、個体を取って、形容詞の指定する次元（dimension）を持ったスケール（scale）上の度合い（degree）に写像する測量関数（measure function）であると考える（Cresswell 1976; Heim & Kratzer 1998; Kennedy 1999 などを参照[3]）。次元とは、高さ、長さ、幅といった段階形容詞を特徴づける意味的要素であり、スケールとは順序づけられた度合いの集合である。測量関数とは個体を取って、あるスケール上の度合いを返すような関数である。通常の段階形容詞は、スケールがその形容詞と被修飾名詞の両方によって指定されるが、本研究では、「多い／少ない」は語彙的意味においてスケールを決めるための属性（後述する「領域（domain）」）が指定されていないため、単独での装定が通常は不可能になると考える。スケールの属性を完全に指定するためには、ガ格項の明示的使用、文脈からのガ格項の復元、比較対象の明示、といった手段を使う必要があると考えるのである。

次節では、「多い」「少ない」が段階形容詞であると考えられる理由、さらに、

段階形容詞としてどのような意味を表しているのかについて考察する。

３．段階形容詞である「多い／少ない」

形式意味論においては、表１にまとめられるように、段階形容詞について主に２つの立場の研究があるが、本稿は Scalar Analysis の立場に立ち、「多い」と「少ない」の使用制限がある理由を明らかにする。

表１　段階形容詞の意味分析の２つの立場

	主張	代表的な研究
Vague Predicate Analysis	gradable adjectives are of the same semantic type as non-gradable adjectives: they denote functions from objects to truth values	Klein (1980, 1982, 1991)
Scalar Analysis	gradable adjectives denote relations between degrees and individuals	Cresswell (1976); Kennedy (1999); Kennedy & McNally (2005); Kennedy (2007)

３．１　「多い／少ない」が段階形容詞であると考えられる根拠

(5) が示しているように、「多い」と「少ない」は「高い」と同じように程度副詞の修飾を受け、比較構文にも現れる。

(5) a. 図書館に人が｛最も／とても／比較的／やや｝｛多い／少ない｝。
　b. アフリカの資源は日本より｛多い／少ない｝。
　c. 日本では最も高い山はどの山ですか？
　d. 富士山は｛とても／比較的／やや｝高い。
　e. 富士山は阿蘇山より高い。

Klein (1980)、Kennedy (1999a)、Paradis (2001) によると段階形容詞と非段階形容詞の違いは次の二つの特徴によって示される。一つは、段階形容詞は度

合い修飾要素（degree modifiers）の修飾を受けるのに対し、非段階形容詞（non-gradable adjective）は度合い修飾要素の修飾を受けない。もう一つは、段階形容詞は「-er/more、less、as、too、enough、so、how」といった度合い構文（degree construction）に現れるのに対し、非段階形容詞は度合い構文に現れない。（6）はその例である。

（6）a. The city lights are fairly bright tonight. （Kennedy 1999a）
b. Venus is brighter than Mars. 〃
c. ??Giordano Bruno is very dead. 〃
d. ??Giordano Bruno is too dead to fly on the space shuttle. 〃

（5）で見たように、「多い」と「少ない」は程度副詞による修飾を受け、比較構文にも表れることから、「高い」と同じ段階形容詞であると考えることができる。

３．２　段階形容詞の意味について

段階形容詞の意味について、Kennedy & McNally（2005）は以下のようにまとめている（Cresswell 1976; Heim & Kratzer 1998; Kennedy 1999 なども参照）。

gradable adjectives map their arguments onto abstract representations of measurement, or DEGREES, which are formalized as points or intervals partially ordered along some DIMENSION (e.g. height, cost, weight…). The set of ordered degrees corresponds to a SCALE. Kennedy & McNally (2005: 349-350)

さらに、Kennedy & McNally（2005）によると、形容詞のスケールには３つのパラメーターがある。それは度合いの集合（set of degrees）、次元（dimension）、順序関係（ordering relation）である。それに対応して、あるスケールを他のスケールと区別には、３つの観点からの方法があると Kennedy & McNally（2005）は述べている。それは度合いの集合が表している測量値（measurement values）

の特性の観点、次元パラメーター（dimensional parameter）の観点、順序関係の観点からの方法である。

次元パラメーターの観点から区別されている例として、tall と flexible が挙げられている。*tall* の次元は高さ（height）で、*flexible* の次元は柔軟性（flexibility）である。

順序関係の観点から区別されている例として、*tall* と *short* が挙げられている。*tall* と *short* は同じ次元と度合いを持つが、並べられている度合いの順序関係が逆になっている。

しかし、異なる形容詞であってもスケールの３つのパラメーターが同じである場合がある。例えば、*tall* と *wide* と *long* である。Kennedy（2001）および Kennedy & McNally（2005）は、(7) のような文が容認されるのは、比較される段階形容詞が同じ次元を持つためだと説明している[4]。

(7) a. The space telescope is <u>longer</u> than it is <u>wide</u>. （Kennedy 2001:37）

b. They call him 'The Bus' because he's kind of as <u>wide</u> as he is <u>tall</u>.

（Kennedy & McNally 2005:352）

Kennedy らの主張に従えば、「高い」と「長い」についても次元は同じであると考えられるため、両者の区別がなされなくなってしまう。しかし、実際には、「高い」と「長い」の意味は異なる。例えば、「机」に関して言えば、「高さ」は一般に机の脚の先から天板までの距離について述べられるものであり、「長さ」は天板のより大きい距離を占めている辺の距離について述べられるものである。

本稿では、この問題を解決するために、上記のような形容詞を区別する条件として、次元が成立するための領域（domain）という概念を導入する。例えば、「高い」と「長い」の違いについて言えば、それらの次元は「距離」であるが、領域は、「高い」については「鉛直方向（の距離）」、「長い」については「物体の占める領域の中の最大（の距離）」といった意味的な要素であるということになる。これらの要素は「高い」「長い」の形容詞としての意味にとって本質的なものであり、それらを区別するために必須の要素である。従って、それらを領域と

して次元とは別に規定する必要があるのである。

領域は、原則的にそれぞれの形容詞の語彙的な意味として指定されている。したがって、被修飾名詞と次元との関係や、文脈、一般的な知識、言語的慣習などと領域との整合性によって、どの形容詞が適切に修飾を行えるかが決まる。例えば、「柱」については「長い」より「高い」で修飾することが一般的であるが、「ロープ」については、仮にその鉛直方向の距離が問題になる場合であっても「高い」より「長い」で修飾することが普通である。このような形容詞の選択は被修飾名詞の意味と領域の意味との関係に依存している。また、英語では *wide*、中国語では「宽」という形容詞があり、それは「高い」や「長い」などとは区別して使われるが、日本語ではそれを形容詞ではなく「幅」という名詞で表現する場合がある。

(8) a. How wide is the Grand Canyon?
b. 大峡谷多宽？
c. グランドキャニオンの幅はどれくらいですか。

英語の *long*、*high*、*wide* はすべて距離を次元として持つが、その領域はそれぞれ異なっている。すなわち、同じ次元であっても、それは様々な領域と結びついてそれぞれ異なる形容詞として語彙化されると言える。しかし、(8) のような対比から分かるように、その語彙化のあり方は言語ごとに異なると考えられる。

次節では、これまでの議論に基づき、「多い／少ない」について考えていくが、上述のように、「多い／少ない」は段階形容詞と考えられるため、上述のような段階形容詞の特徴から、「多い／少ない」は個体を取って、「数／量」という次元における度合いの集合に写像する測量関数であると考えることができるだろう。また、順序関係については「多い」と「少ない」は逆になっていると考えられる。

問題は、本節で導入した概念である領域が「多い／少ない」においてはどのように指定されるのか、という点である。次節では、本節で提示した枠組みに基づき、「多い／少ない」の領域の指定のあり方が他の形容詞と異なることを示し、

その違いが「多い／少ない」特有の用法制限を生じさせていると主張する。さらに、「多い／少ない」の領域指定の３つの方法を示し、それぞれがどのように領域を指定しているのかを考察する。

４.「多い／少ない」における使用制限のあり方

前節では、段階形容詞はスケールを決めるためにそれが表す次元の成り立つ領域を指定する必要があることを述べた。本稿では、「多い／少ない」はこの領域指定のあり方が他の形容詞と異なっており、それが「多い／少ない」の使用制限につながっていると主張するが、本節では、「多い／少ない」を「高い」と比較しながら、それらが領域の指定という点でどのように異なっているかを見ていく。

４.１　「多い／少ない」と他の段階形容詞の相違

前節で述べたように、段階形容詞の使用においては領域が指定される必要があり、その方法の一つとして二重主語構文がある。これは「多い／少ない」だけでなく、段階形容詞一般に成り立つ特徴である。（9）が示しているように、段階形容詞の「高い」についても、ガ格によって領域を明示する必要がある場合がある。（9）の各例を装定に言い換える場合でも、ガ格は必須である。つまり、（9）の各例の場合、「高い」と「多い／少ない」は同じようにガ格によって領域を決める必要があると考えられる。

(9) a. 昨日パラパラと雨が降ったせいか、今朝は異常に<u>湿度が</u>高い。
　b. 採用される<u>可能性が</u>高い。
　c. この詩人の<u>人気が</u>高い。
　d. 景気のよくない今日、黒人とスペイン系青年の<u>失業率は</u>高い。

（いずれも BCCWJ）

同様のことは小川他（2020）によっても指摘されている。小川他（2020）は、日本語には（10）のように「〜が高い」といった冗長的あるいは迂言的な表現が存

在することを指摘し、(10) の「背」などの名詞はスケールを決めるための次元に当たると述べている。

(10) 高さが高い／背が高い／年齢が高い／値段が高い／価値が高い／人気が高い／音が高い／気温が高い／湿度が高い… (小川他 2020)

さらに、小川他 (2020) は (10) のような表現ができる理由について、統語的な解釈を与えている。「X は〜が高い」といった構文は、(11a) のように次元が Referential Phrase 指定部を占めるという基底構造をもつと解釈される。この基底構造がそのまま表層構造となれば (9), (10) が得られ、Referential Phrase 指定部が Phonetic Form で削除されれば (11b) が得られる[5]。

(11) a. $[_{TP}$ X は…$[_{vP}$ $[_{RP}$ 高さが $[_{R'}$ R $[_{AP}$ 高い]] v (φ)] T (φ)]] (小川他 2020)
b. $[_{TP}$ X は…$[_{vP}$ $[_{RP}$ 高さが $[_{R'}$ R $[_{AP}$ 高い]] v (φ)] T (φ)]] 〃

そのため、「高い」についても次元は語彙的に含まれておらず、「高い山に登ると、平地では見られないチョウに出会う／富士山は高い」のような文における下線部については、「高さが高い」における「高さが」の部分が Phonetic Form で削除されているだけであるとされる[6]。

小川他 (2020) における次元を本稿が主張する領域に当たると考えると、小川他 (2020) の分析は「多い／少ない」の性質に対する説明としても有益だと思われる。すなわち、「多い／少ない」も「高い」と同様に、ガ格によって領域を決める必要があると考えるのである。

しかし留意すべきことは、「高い」では「背が高い」においての「背が」が削除されないことと、「多い／少ない」では「しわが {多い／少ない}」においての「しわが」が削除されないことは同じである。一方、「高い」では「高さが」の出現が随意的で、「多い／少ない」ではそうではない。「多い／少ない」が数量を表すとすれば、小川他 (2020) の分析に従うと、「多い／少ない」が単独で使われ

る場合、仮に「数」あるいは「量」が RP 指定部を占めていれば、「高い」において「高さが」が PF で削除されるのと同様に、「数が」や「量が」が削除されてもよいはずである。しかし、実際には「数が」や「量が」が削除され、文が成り立つことは不可能である。

(12) a. (高さが) 高いビルがある。
　　b. *（数が）｛多い／少ない｝人がいる。

そもそも、(13) が示すように、「数／量」をガ格で補っても、その文は容認されない[7]。

(13) a. *｛多い／少ない｝クジラがいる。
　　b. * 数が｛多い／少ない｝クジラがいる。
　　c. * タンクに多い水が溜まっている。／ ?? タンクに少ない水しか溜まっていない。
　　d. * タンクに量が多い水が溜まっている。／ * タンクに量が少ない水しか溜まっていない。

そのため、「高い」が単独で主名詞句を修飾できて、「多い／少ない」ができないのは、「高い」が表す「高さ」と、「多い／少ない」が表す「数／量」の違いによる。

前節の最後で述べたように、「高い」と「長い」は同じ次元を持つと考えられるため、それだけを見ると、両者のスケールを区別することができない。例えば、立方体を想像すると、「高さ」「長さ」「幅」のうち「長い」のはどの辺に当たるかが分からないはずである。

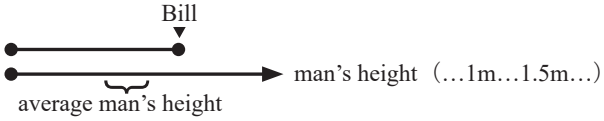
ところが、「高い」は単独で名詞を修飾することができる場合が多い。それは、次の（14）と（15）から分かるように、「高さ」は被修飾名詞の属性であり、被修飾名詞の意味から次元が成立する領域を指定することが可能になるからである。続いて、「高い」のような段階形容詞が単独で使われる場合、その領域は形

容詞と被修飾名詞の両方によって決まるのを説明する。

Cresswell（1976）は、*Bill is a tall man*. は「Bill is a taller than the average man.」の意味であることを指摘している。それを図示すると（14）のようになる。このことは日本語の「高い」についても同様と考えられる。「富士山は高い」は「富士山が山の平均の高さより高い」という意味で、図示すると（15）のようになる。

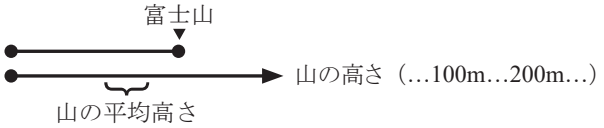
（14）a. Bill is a tall man.

b.



（15）a. 富士山は高い。

b.



tall や「高い」の場合は、領域は形容詞と被修飾名詞の両方によって決まると考えられる。つまり、（14）と（15）が示すように、人について述べる場合と山について述べる場合、領域が異なり、それぞれ「man's height」と「山の高さ」になっている。実際、日本語の場合には、山の高さと人の背の高さは、異なる表現を使用する必要がある。

（16）a. 富士山は｛高さが／φ｝高い。

b. バスケットボール選手は｛背が／*φ｝高い。

一方、「数／量」の場合、何の数あるいは量であるのかが決まってはじめて、別のものの数あるいは量と区別することができるようになる。（17）と（18）、（19）と（20）の対比から分かるように、「数／量」だけでは、比較される基準が

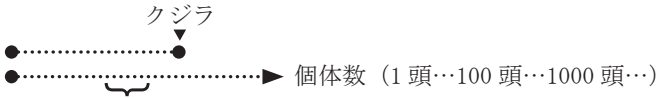
決まらないため領域を決めることができない[8]。何の数なのか、何の量なのかを述べてはじめて領域が決まるのである。

(17) a. ?? クジラは多い。

b.

(18) a. クジラは個体数が多い。

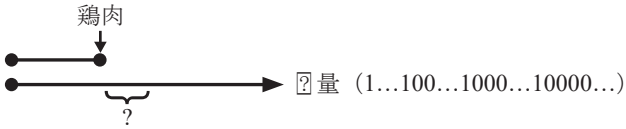
b.



動物種の平均個体数／文脈で提示された個体数

(19) a. ?? 鶏肉は少ない

b.



(20) a. 鶏肉は脂身が少ない

b.

他の肉の脂身の量／文脈で提示された脂身の量

このような「多い／少ない」の特性は、度合いの集合が表している測量値の特性の決定においても問題を引き起こすと考えられる。(14) と (15) を観察すると、高さについてのスケールは度合いの単位は被修飾名詞の意味によって自然に決定される。すなわち、人の背の高さと山の高さについて述べる場合、両者の測量値は人と山の性質からそれぞれに妥当な値が決定される。一方、「数／量」の場合、スケールの度合いは数字であり、何の数なのか、何の量なのかが明確にな

らなければ測量値を適切に設定できないと考えられる。

このように、「多い／少ない」が固有に持つスケールである「数／量」は、「高い」などの他の段階形容詞が持つスケールとは意味的性質が異なっており、それによって「多い／少ない」の使用に制限が生じると考えられる。

このことは、「多い／少ない」においてもその領域が何らかのやり方で決定されさえすれば適切な使用が可能になることを意味する。次節では、多い／少ない」におけるスケールがどのように適切に決まるのかを考察する。

４．２　「多い／少ない」の次元が成り立つ領域の指定方法

この節では、「多い／少ない」の領域の指定のための方法のうち、３つのやり方を取り上げる。

一つは、(18) や (20) のようなガ格を明示する方法である。この方法のバリエーションとして、(21) のような「～数／～量」という複合語の形で領域が現れる場合もある。(22) のような、一見「数が多い」単独で名詞を修飾する例もあるが、それはそれぞれ「茎の数、匹数、枚数、士兵の数、人数、流星の数、個体数」が文脈上省略されていると考えられる[9、10]。

(21) a. 在庫数が多いホテル・旅館を上位に示す傾向があります。
b. 理事数が多い法人として、百人以上のものが六十六法人となっている。
c. 交通量が多い道路にドリームを置くわけにもいかないし、脇道に置くのも野次馬が心配だった。
d. 産地すべてに共通して、日照量が多い地域ほどぶどうが熟すので、糖度が高くアルコールの強い、薫り高い濃厚なワインができる。（いずれも Sketch Engine）

(22) a. 一人で夕食というようなときは、鶏肉のだしで小松菜をたくさん入れてお雑煮にする、これはうまい。大きく育ったのよりも間引いたような短くて、数が多い束が好きだ。
b. 調査でも、あまりお目見えしないようで、複数の知人に尋ねても、「採っ

たことない」とのことで、決して数が多い種[11]ではないようです。

c. お腹いっぱいでも DVD 見ているとついつい何かつまんでしまいすぐなくなるので、数が多いえびせんなんかは安い割に長持ちしてくれます 。

d. 一般的には、戦いは数が多い陣営の生存率が高くなります。

e. そんな訳で、消費者を数が多い年配のゾーンに絞るか、どうしても若者からお金を取りたかったら本当に魅力ある物を信頼と共に売りこん でいくしかないわけで 。

f. 夜空を見上げて、流れ星を数えてみませんか？国立天文台（三鷹市）は、ふたご座流星群の活動がピークを迎える 14 日前後にキャンペーン「ふたご座流星群を眺めよう」を実施する。数が多い同流星群は初心者にも見つけやすく、天文台では「気軽に参加して」と呼びかけ . . .

g. 野生生物の生態を知るのは、難しいのですね。数が多いカマイルカでさえ、こんな状況です。もし、カマイルカが絶滅しそうになったら、私たち の力では、救えないかも知れません。　（いずれも Sketch Engine）

二つ目の領域の指定方法として、(23) が示すように、主名詞句が修飾され限定される場合がある。この場合、「多い／少ない」が単独で主名詞句を修飾できる。

(23) プラスチックを食べて死んでしまったクジラは｛多い／少ない｝。

(23) は、(24) で示している 3 つの読みができる。d は、基準値の degree を表し、「{≧ / ≦}」において、スラッシュの左側は「多い」の場合、右側は「少ない」の場合の解釈を表している。(24) の各例の領域はそれぞれ異なっている、文脈によって、どの解釈を取るのかが決まる。このように、主語を限定することによって何の数／量なのかを指定することができる。

(24) a. 死んでしまったクジラのうちプラスチックを食べて死んでしまったクジラの数｛≧ / ≦｝d。

b. プラスチックを食べて死んでしまった動物のうちクジラの数｛≧ / ≦｝d。
c. プラスチックを食べたクジラのうち、死んでしまったクジラの数｛＞ / ＜｝死ななかったクジラの数。

第三に、比較の対象を明示化するという方法がある。木下（2004）は、「多い／少ない」の装定が可能になる条件として比較対象の明示化を挙げている。(25) はその例であるが、これは主格名詞句が修飾され限定されたものでなければならないというという点で（23）と類似している。例えば、(25a) は「英語学習者 A が犯した誤りのうち、冠詞の使い分けの数＞他の誤りの数」、(25b) は「この辺で起こった事故のうち、車と自転車の接触事故の数＞他の種類の事故の平均数」という形で何の数なのかが決まる。

(25) a. 一番多い誤りは冠詞の使い分けです。
b. この辺で多い事故は車と自転車の接触事故です。
c. 日本で多い苗字と言えば、鈴木、佐藤、山田などだけど、さて、アメリカ人に多い苗字って何だろう。
d. 灯のない街に昼間より多い人が出ている。
e. 昨日より多い人たちで境内はにぎやか。
f. その時はもうすでにいつもより多い人が電車に乗っていました。(いずれも木下 2004)[12]

５．まとめと今後の課題

本稿では、まず「多い」と「少ない」は、Kennedy & McNally（2015）らが言う段階形容詞であり、段階形容詞としてスケールを決める必要があることを述べた。そして、Kennedy らが提起するスケールの３つのパラメーターのうち、次元にはそれが適用される領域を指定する必要があるという提案を行った。さらに、「多い／少ない」と「高い」の比較に基づき、「多い／少ない」と他の段階形容詞との類似点は、「X は Y が＜段階形容詞＞」のように、「Y が」によって領域を決める必要がある点にあると述べた。さらに、「多い／少ない」と「高い」の装

定や述定における振る舞いの違いは「高さ」と「数／量」という 2 種類の次元の違いに起因すると主張した。「高さ」が、主名詞句（被修飾名詞句）の意味との関係によって領域を明示しなくても決定が可能であるのに対し、「数／量」は何の数なのか、何の量なのかを述べなければ比較の対象が決定できないと同時に、次元が自然数の列でしかなく、測量値の決定についても問題が生じると主張した。さらに、領域指定の手段として、ガ格による指定（二重主語構文）以外に、「～数」「～量」という複合による指定、連体修飾による指定、比較対象の明示化による指定、があることを示した。

今後の課題として、「多い／少ない」と「many / few」の違いをどう解釈するのかが考えられる。「多い／少ない」と「many / few」の共通点は、述語として使われる場合、主格名詞が修飾され、限定されたものである必要があるということである。一方、「many / few」は装定用法を主な用法とする点で「多い／少ない」と異なる。このような違いが何に由来するかについては、さらに検討を深める必要がある。また、本稿で提案した領域という概念についてもさらに考察し、次元との関係の明確化を目指したい。

注

1　本稿では、『日本語書き言葉均衡コーパス』からの用例は「BCCWJ」と記載する。

2　「類別する機能」について、朱（1956）は「白紙（白い紙）」という例を挙げて、紙には様々な 色の紙があるが、黒い紙ではなく、白い紙であるという意味で解釈されるのが形容詞の「類別する機能」だと述べている。詳細は包雅梅（2021）を参照されたい。

3　従来、数量を表す言葉を量化詞だと分析すべきなのか、形容詞だと分析すべきかの議論が続いており、本研究は「多い／少ない」が形容詞で、且つ段階形容詞であることに注目し、他の段階形容詞との相違を明らかにすることにより、「多い／少ない」の使用制限を説明する。ここで挙げている 3 つの研究は数量を表す言葉についての研究ではなく、Heim & Kratzer（1998）は形容詞の semantics を言及している研究で、Cresswell（1976）と Kennedy（1999）は degree-semantics 分析に基づいて、段階形容詞の semantics を言及している研究である。「多い／少ない」の段階形容詞としての側面を重視するため、上述の 3 つの研究を参考にしている。

4　Kennedy & McNally（2005）によると tall は height を dimension とし、wide は width を dimension とするが、tall と wide はより抽象的な linear extent という dimension を共有しているとしている。long についても同様であると考えられる。

5　小川他（2020）では、網掛け部分は移動要素の元位置を示すとされているが、(11b) では、削除される要素の元位置を示すものと考えられる。

6　本研究は、小川他（2020）と同じ理論的立場に立つものではないため、「高さが」が Phonetic Form で削除されているという分析を必ずしも支持するものではない。

7　佐野（2016）では、「多い／少ない」については、述定においても装定と同様の生起制限があると述べているが、述定用法においては「数」「量」を付加することで容認性が上がるという現象が見られる。特に「少ない」の場合、及び「数」の場合にそれが顕著に表れる。

(i) ? クジラは数が多い。／クジラは数が少ない。
(ii) ? プラスチックごみは量が多い。／? プラスチックごみは量が少ない。

この現象について、王（2011）は「少しの」が不可算名詞を修飾し、「量」しか修飾できず、「数」を修飾する機能は「少ない」が担うことになり、「少ない」の名詞修飾用例が「多い」より多く現れることを指摘している。

8　英語の場合も、Solt（2015）によると、「Cockroaches are widespread/??many」「?Trees are few」のように「many/few」は総称名詞（kind-denoting bare plurals）を主語に取らない。種を指示する総称名詞が主語になる場合、数えられる subparts がないため、文が容認されにくいと説明されている。

9　ここでは「数」に関する例しか挙げていないが、「量」に関しても同様であると考える。

10　例文（22e）の「数」がが「人数」の省略であると考えられる理由に関して、匿名査読者から指摘があった。それは、消費者はある人間の集団を表しているように思われるから、後接の「数」が「人数」であるという予測がつくという指摘である。

11　この用例は「テングヨウジ」というヨウジウオ科の魚について述べており、ここで言う「種」は魚種のことを表している。

12　例（25d）、(25e)、(25f）の自然さについて、母語話者によって判断結果が異なるということもあるが、それらの例はいずれも木下（2004）により、実例である。出典はそれぞれ「www.unicef-osaka.jp/topic.htm」、「www.sakuratabi.tv/tabi/03/030409/030409.htm」、「www.max.hi-ho.ne.jp/yoshi-ko/Nagano/CloseCer.htm」となっている。

参考文献

今井忍（2012）「なぜ「多い学生」「少ない本」と言えないのかー＜存在＞の意味成分に基づく再検討ー」『日本語・日本文化』第 38 号 pp.53-80.

今仁生美・宝島格（2008）「「少し・少ない」及び「たくさん・多い」の意味論的分析」『名古屋学院大学論集　言語・文化篇』19 巻 2 号 pp.13－23.

小川芳樹・新国佳祐・和田裕一（2020）「「X は高い」と「X は高さがある」の比較から見た尺度構文の統語構造」由本陽子・岸本秀樹編『名詞をめぐる諸問題：語形成・意味・構文』開拓社 pp.150-173.

木下りか（2004）「形容詞の装定用法をめぐる一考察ー「多い」「遠い」の場合ー」『大手前大学人文科学部論集』第 5 号 pp.25-35.

小西友七編（1989）『英語基本形容詞・副詞辞典』研究社

仁田義雄（1980）『語彙論的統語論』明治書院

佐野由紀子（2016）「「多い」の使用条件について」『日本語文法』第 16 号 pp.77-93.

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味 III』. くろしお出版

包雅梅（2021）「「多い・少ない」とその類義語の「おびただしい／わずかだ」の違い −形容詞の段階性と有界性から− 」『日本語・日本文化研究』第 31 号.

王淑琴（2011）「「A- い」と「A- くの」の名詞修飾用法の特徴」『政大日本研究』第 8 号国立政治大学日本語文学系 pp.69-97.

朱德熙（1956）「现代汉语形容词研究」『语言研究』第 1 期 : 3-41

Cresswell, M. J. (1976) “The semantics of degree.” In B. Partee (ed.), *Montague Grammar*. New York: Academic Press, pp.261-292.

Paradis, C. (2001) “Adjectives and boundedness.” *Cognitive Linguistics*, 12-1, pp.47-65.

Cruse, A. *Lexical Semantics*. Cambridge University Press. (1986)

Heim, I. & Kratzer, A. *Semantics in generative grammar*. Oxford: Blackwell Press. (1998)

Kamp, H. (1975) “Two theories of Adjectives.” In E. Keenan (ed.) *Formal Semantics of Natural Language*. Cambridge University Press, pp.123-155.

Klein, E. (1980) “A semantics for positive and comparative adjectives.” *Linguistics and Philosophy*, 4, pp. 1-45.

Kennedy, C. *Projecting the Adjective: The Syntax and Semantics of Gradability and Comparison*. New York: Garland. (1999a)

Kennedy, C. (1999) “Gradable adjectives denote measure function, not partial function.” *Studies in the Linguistic Sciences*, 29, pp.65-80

Kennedy, C. (2001) “Polar opposition and the ontology of ‘degrees’.” *Linguistics and*

Philosophy 24, pp.33-70.

Kennedy, C & McNally, L. (2005) “Scale Structure, Degree Modification, and the Semantics of Gradable Predicates.” *Language*, 81, pp. 345-381

Rett, J. (2018) “The semantics of many, few, and little.” *Language and Linguistics Compass*, 12. e12269.

Sapir, E. (1944) “Grading: A study in semantics.” *Philosophy of Science*, 11, pp.93-116

Solt, S. (2015) “Q-adjectives and the semantics of quantity.” *Journal of Semantics*, 32, pp.221–273.

ホウ　ガバイ（大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程）

The semantics of Japanese quantity adjectives Ooi and Sukunai

An Analysis in terms of similarity between *ooi* / *sukunai* and *takai*

BAO Yamei

In this paper, we deal with two Japanese adjectives, *ooi* and *sukunai*, which roughly mean 'many' and 'few', respectively. *ooi* and *sukunai* show some peculiarities in their use. In most cases these two adjectives cannot be used attributively. And these two adjectives disallow unmodified kind-denoting noun as subjects.

This paper develops an analysis of *ooi* and *sukunai* are like gradable adjectives map their arguments onto a scale. But *ooi* and *sukunai* cannot specify their scales . And according to Kennedy & McNally (2005) , scales have three crucial parameters : a set of degrees, which represent measurement values; a dimension, which indicates the kind of measurement; and an ordering relation. But in terms of properties of the set of degrees and the dimensional parameter *ooi* and *sukunai* cannot specify the scales.

ooi and *sukunai* encode quantity or amount as a dimension. *takai* share the sales that share the same dimension with *nagai* . Both of them involve orderings along a dimension a dimension of linear extent (Kennedy & McNally 2005). Thus, *takai* also cannot specify their scale in terms of dimension in some cases. We proposed that the dimension need to specify the domain to which it is applied. We found that *ooi* and *sukunai* are like gradable adjective *takai* need to specify the domain by the form like “Y*ga*” in the“X+*wa*+Y+*ga*+gradable adjectives”.